

## 第V群 座長のまとめ

奈良 医 大  
松 永 喬

佐々木(城西歯大)は急性および慢性扁桃炎に対して超音波ネブライザーによるトランサミン 1.0 gr (10ml) 単独療法とパニマイ 100 mg (3 ml) 併用療法との臨床効果を報告した。扁桃炎 47 例 (平均年齢 37 歳) に対し単独療法では 61.9 %, 併用療法では 82.6 % の有効率を得、症状別では咽喉頭痛 75.5 %, 異物感 78.8 % の改善率を認め、ネブライザーの回数は急性扁桃炎では 2 ~ 3 回、慢性扁桃炎では 8 回、平均 4 回で有効で疼痛は 2 回、異物感は 7 ~ 8 回で改善が得られるとした。また血清トランサミン濃度より咽喉・口蓋扁桃のトランサミン濃度の方が高くトランサミンの超音波ネブライザー療法の有効性を述べた。

兵(京都市)は超音波ネブライザーの有効性を左右する粒子径、導管の長さ、バイブレーターの振動数の 3 因子の有用率をさらに上昇させるため鼻・咽・喉頭用のネブライザーを用い種々の模型実験を行った結果を報告した。それによるとコンカルホーン型超音波ネブライザーの振動子を用いると水槽がなくても薬液槽のみで平均径  $17.2 \mu\text{m} \pm 4.46 \mu\text{m}$  の粒子が得られること、演者考案の鼻・咽・喉頭用の各アダプターを装着すると導管内に粒子の貯溜がないこと、発生粒子を含む気柱を旋回させると粘膜への粒子沈着を増加させ得ること、深吸気時のみ粒子を発生させると呼気時のロスはないことなどを述べた。そして超音波ネブライザー療法の臨床には温度、湿度のほか無導管で振動を加え、気柱を旋回させ、深吸気のみ粒子を発生する装置が近未来的超音波ネブライザーとして望まれるとした。

西沢(真正会病院)はアレルギー性鼻炎に Baicalein, Histaglobin, MS antigen, ブロンカスマのネブライザー療法を、diffuse panbronchiolitis DPB、慢性副鼻腔炎に Minomycin のネブライザー療法を行い、これらの薬剤の全身投与療法との臨床効果を比較検討した。また犬にブロンカスマ、Minomycin 及びコントロールとしての生食水を吸入させ肺病変を検討した結果も報告した。それによるといずれの薬剤でもネブライザー療法の方が全身的療法より臨床的効果がよく、血中への薬剤移行も少なく副作用もほとんどなかったとし、また犬の実験で Minomycin, ブロンカスマの吸入は生食水に比べ鼻 気管に肉眼的変化をおこし組織学的にも肺組織のうっ血、肺胞の肥厚、間質の細胞浸潤をおこすので、これらの薬剤の長期間使用は注意したいと述べた。

以上の 3 題はエアロゾル療法の臨床応用の基礎的問題と各種の薬剤による臨床的有効性および実験的研究の報告であったが、全身的投与より有効性が高く、全身的影響の少ない効果的なエアロゾル療法の開発がこれからの課題と思われた。